

陸前高田市から学ぶ

あれから3年と9カ月。今、復興はどのように進められているのか。また、私たちはその経験から何を学び、何をすべきなのか。

語り手 戸羽 太 聞き手 花川 雅昭 北川 嗣雄
取材 2014.11.27

平成23年3月11日(金)、14時46分に発生した牡鹿半島東南東130km付近 深さ24kmを震源とする東北地方太平洋沖地震。地震の規模を示すマグニチュードは日本観測史上最大の9.0。政府はこの地震による震災の名称を「東日本大震災」とした。全長2kmの砂浜に約7万本の松が並び、国の名勝として知られた高田松原。津波により一本を残しすべて倒され、流されてしまう。残った一本の松は奇跡と称され、復興のシンボルに。

写真協力：陸前高田市



▲平成26年7月2日、陸前高田・広田湾特産の高級貝「エゾイシカゲガイ」が震災後初めて出荷

3年ぶりに、復興計画折り返し時点の陸前高田を訪れ、戸羽市長にお話をうかがいました。

今、市街地を歩いてきました。山を切り崩して、市街地をかさ上げするすごい工事ですね。3年間地元で頑張っただけ、気を抜くところがないように見えますが。

復興の現状

ひとつずつ復興の希望の芽が

今、すべての事業がレールに乗ったので、少しずつ、時間はかかりませんが着実に進めるところまでできました。職員も精神的に苦勞はしてませんが当時より良くなっています。

一次産業なんかはかなり復興してきたので、まずは住むところですね。仮設住宅2,150軒の入居率は70%を超えています。まだ、それぐらい復興ができていないんです。1,000世帯分つくる予定の災害公営住宅も120世帯分しか完成してません。防災集団移転促進事業という高台移転は28カ所計画があり、全部工事が始まっています。16カ所が完成し、残りの12カ所も来年度で

家が建てられるようになります。

2番目には商業者の商売を本格的にやる場所です。今、99%仮設店舗ですから。居酒屋さんから本屋さんや床屋さん、みんなすべてプレハブで営業しているので、市街地の中心に新しい商店街を造るってことで動いています。来年の今頃には建物が建てられるようになります。

津波対策「命を守るため。」

地盤から10mぐらいかさ上げをします。津波が防潮堤を越えても居住区域や商店街には入らない計画です。この事業で使う土の総搬出量は東京ドーム約4杯分、来年7月頃に完成します。気仙川を挟んだ対岸

▼ベルトコンベアで市街地へ土を運ぶ様子



の山を削り、総延長3kmのベルトコンベアで土を市街地へ運んでいます。私たちは復興を8年間で考えています。3年8カ月が経過し、残りの4年半でまちづくりをしなければなりません。

前は自宅にも帰らず、この部屋で寝泊りしていると話されていました。その当時の状況を振り返り、どのような課題がありましたか。

当時に振り返る

地震から津波が押し寄せる

市役所が全壊したので、業務場所は、給食センターの狭い部屋を災害対策本部にしました。初めの一週間



ベルトコンベアや大型重機を使うことで9年を要するかさ上げ工事を約2年半に。

かさ上げの状況

は死亡届の受付だけです。転出届を持ってこられても、『そんなのできませんよ。』というような話でした。（相手方の役所に行けば手続きしてくれるのではと考えていました。）冷静に仕事することは無理でした。ご遺体が次々に運び込まれ、身元を明らかにしなければいけない。ところが、ご遺体はみんな傷んでいて、性別もわからない状態でした。収容場所もないので最後は隣の大きな体育館も遺体安置所として協力していただきました。棺桶も足りませんでした。

多様な目線の必要性

被災した時には水や食料が必要だとか、毛布が必要だとかは想定ができます。困るのはトイレです。生理現象というのは飲まず食わずでも起こります。200人も避難所に入り、電気が止まると浄化槽も下水もストップします。重機で地面を掘り、板を渡し、用を足した後に石灰を捲く。若い女性でも、恥ずかしいとか、汚いとかそういうレベルではありません。一週間も避難所での暮らしが続くと、下着が必要になります。避難所の男性職員は、パンツのことは気にしてるんですけども、ブラジャーなんて頭にはありません。正直言って『どうすりゃいいんだ。』って話になります。日ごろから女性職員に考えてもらう大事なポイントです。被災現場イコール男性のようなところがありますが、女性にしかわからないところは女性が担当すべきです。

困難をきわめた情報収集

流れなかった家が避難所になる場合もあります。親戚の方々が集まったりするケースです。ところが、公民館などの避難所に届いた支援物資を『お前ら家あるんだからだめだよ。』って、渡さないことがありました。避難所であろうが家にいようが、当時は誰も食料などを手に入れることができません。自宅に避難してい



戸羽 太（とば ふとし） 陸前高田市市長（りくぜんたかたしちよう）

平成 23 年 2 月 13 日に市長に就任。その 1 カ月後、地震が発生。前回の訪問時は職員と一緒に仮設庁舎で寝泊りしていた。『みんな、家を流され、仮設住宅も建っていない時。そうすると、帰る場所もない。』

る被災者の情報を入手する方法がなかったのも、自衛官に全部歩いて調べてもらいました。確認後、食料などを届けてくださいました。その業務はかなり時間がかかりました。

忘れられない 悔しい思い

職員、消防団、民生委員など公的な方々の命をどう守るのか。『公務員は逃げちゃいけない。』という雰囲気があります。以前、市内のスーパーの社長に『店にいたお客様や従業員は全員無事。にもかかわらず、市役所ではたくさんの方がお亡くなりになられた。』と言われました。非常に悔しい思いをしました。市では臨時職員や嘱託職員を含め 400 人ぐら

いの職員の内、111 名が犠牲になりました。一度の津波で 100 名を超える職員が亡くなることなんてあってはいけません。『公務員だから、しっかり役目を果たさなきゃいかん。』ということでたくさんの方が亡くなってしまったんです。もちろん職員は一定の仕事をするべきです。しかし、そんな危険な場所に居続ける必要はありません。一度はお知らせさせていただき、一定のところで仕事を終える、そんなルール（初動マニュアル）が必要です。消防団員も 51 名亡くなりました。こういうことが絶対にあってはいけません。

▼ 震災遺構 陸前高田市立気仙中学校



東日本大震災の検証委員会を各団体や避難所の代表者などで立ち上げ、H26.7月に「陸前高田市震災検証報告書」を発刊されました。そこから見直したことは。

災害に勝つために 間違った推測 被害大きく

大きく見直したのは避難所の設定です。気象庁の発表では『30年以内に99%の確率で宮城県沖地震が発生し津波が来る。』といわれてきました。だから、我々は津波が来ることは予測していました。今のコンピューターは、すごく具体的な数字が出るんですね。市役所は浜から1.5kmほど内陸にあります。国の発表から県がシミュレーションをかけた結果、市役所前の道路の津波の高さはたった50cmでした。震災前に地域住民と話し合ったとき、『津波が来る30～40分の間に、お年寄りなどは避難できないだろう。』という意見が出ました。でも結局、最後は『津波の高さは50cmか1m程度なので大丈夫だろ?』という話になっていました。

想定を覆す津波の高さ 「2度逃げ」できる場所

市役所の前に市民会館があったのですが『ここは3階建てなので、絶対大丈夫だよ。』と言って、当時、多くの方がここに逃げ込みました。

しかし、実際には15mの津波が来て、みんな命を落としました。一番気にして欲しいのはそこなのです。情報は大事ですが、それをすべてだとは思わないでほしい。もちろん情報を知らせることは大事ですが、それを鵜呑みにはしないでほしいのです。

震災後、絶対に津波が来ないという30mの高さの所に避難所を設定していますが、それ以上の津波が来ないという保証はありませんので、避難所より高い津波が来た場合、すぐに後ろに上がれる場所「2度逃げ出来る場所」を条件に設定しています。まさに教訓です。

情報共有とシミュレーション

日ごろから、『ここで地震が起こったら。』『土砂崩れが起こったら。』と話し合ったり、炊き出しなどの訓練をすることが大事です。その他、情報の共有も大事ですね。寝たきりのおじいちゃんと、介護しているおばあちゃんがいるとか、高齢者を連れて逃げるにはどうしたらいいかとか。事前に相談をしているかしていないか、情報を持ってるか持っていないかで、おばあちゃんまで犠牲になることも考えられます。おばあちゃんはおじいちゃんを残して逃げることはできません。しかし、情報を持っていれば、おじいちゃんは助けることができなくても、おばあちゃんを説得し、おぶって逃げることもできます。



震災遺構として保存される道の駅

一目でわかるマニュアルを

地域防災計画などをつくる際、その「計画」をつくるのが主たる目的になってしまいがちです。防災計画は必要ですが、実際の細かい一つ一つのマニュアルを作成するべきです。「避難マニュアル」や「避難所運営マニュアル」などを地域と一緒につくりたいと考えています。一目でみてわかるようなものを各地域の実情に合わせて作成しようとしています。

羽曳野では、現在、「地域防災計画」の改定をすすめています。今回、お話いただいたことを教訓に、実効性ある計画とマニュアルづくりに生かしたいと強く感じました。我々が得難い情報をたくさんお話しいただき感謝します。

message

最後に戸羽市長からのメッセージ

私からは『自分の命はご自身で守ってください。』と申し上げたいです。市長であろうが消防士であろうがみんな被災者なんですから。陸前高田市民は震災を経験しているので、この言葉を「そりゃそうだよ」と納得していただけます。

羽曳野も、南海トラフ地震のリスクを示す数字が発表されています。災害が発生した時を考え、一人ひとりどのような行動をとるのか、地域はどのように構えるのか、そして、行政の対策は万全なのか、もう一度しっかりと考えてみてください。

▼ 訪れた日に標高40mの高台に完成した消防防災センター（2014.11.27）



レポート

report

高田を力走！「しらとり1号&2号」

平成 23 年 11 月に寄付金で給水車「しらとり1号」と消防車「しらとり2号」を準備し、陸前高田市にお届けしました。しらとりの名前には、^{ヤマトタケルノミコト}日本武尊にまつわる白鳥伝説から、困難に力強く立ち向かってほしいという願いが込められています。1号は漏水修理の長期断水時や仮設住宅の受水槽への補給など、2号は火災予防など消防団の取り組みで、今も元気に陸前高田の町で活躍しています。
(▼写真：陸前高田市水道事業所の方々)



皆さんからお預かりした寄付金 50 万円を図書館の図書購入費や小中学校の教育振興と施設復旧に使っていただけるように陸前高田市へ届けました。

(▼写真：左から花川雅昭議長、陸前高田市 戸羽太市長、北川嗣雄市長)



編集後記

羽曳野市議会議員 花川 雅昭

陸前高田市への訪問は 2 回目です。今回は震災 4 カ月後の平成 23 年 7 月に、復興支援活動と現状視察の目的で訪れました。被災地と被災者の状況を肌で感じ、防災対策の強化と防災意識の向上の必要性を強く認識しました。再び、被災地を訪れ震災直後の悲惨な光景を思い出しながら、復興事業である防災集団移転促進事業に伴う、大規模な造成工事や、災害公営住宅建設など復興の息吹と行政の意気込みを感じる事ができました。戸羽市長の「自然災害を完全に防ぐことは、絶対にできない」の言葉は、羽曳野市として、誰もが認識しなければいけないと考えます。今一度、「自助・共助・公助」の観点から、大切な命を守るため具体的な意識と行動が必要です。今後、戸羽市長のメッセージを肝に命じていきたいと思ひます。

これからも、「がんばっぺ、陸前高田！」応援しています。



仮設の店舗が並ぶ復興屋台村（宮城県気仙沼市）

いまだ残る震災の記憶と復興への確かな歩み

陸前高田復興まちづくり情報館



羽曳野市長 北川 嗣雄

足を踏み入れた仮設庁舎内は、活気に満ちた職員さんで溢れかえっていました。その様子は、一步一步、確実に山を登り、頂が近づくほどに気持ちも足取りも力強くなっていく。そんな雰囲気さえありました。

市庁舎に向かう前、震災遺構となった旧道の駅の前の慰霊碑に立ち寄ったところ、そのすぐそばに歌碑がありました。

頬につたふ なみだのごはず 一握の砂を示し人を忘れず

岩手県出身の歌人、石川啄木の歌が刻まれています。『頬をつたう涙をぬぐおうともせず「無限の時間の中のただ一瞬にも等しい時を生きるのが一人一人の人間ならば、だからこそ、今日一日を充実させ生きよう。」そう教えてくれた人を私は忘れない。』諸説あれど、私はこう解釈したいと思います。